

脂腺系腫瘍およびその類縁疾患を考える ―脂腺癌を見逃すな！

羅針盤

今、なぜ脂腺系腫瘍？



安齋 眞一

Ansai Shin-Ichi

PCL 東京 病理・細胞診センター

『脂腺系腫瘍なんて滅多にみないし、なんで今さら？』と思われる方も多いかと思います。そうはいっても、私の日常業務中では、思いの外よくお目にかかります(まあ、私の日ごろみている検体数が多いせいかもしれませんが)。また、教科書的にみても脂腺系腫瘍は他の付属器腫瘍、とくに汗腺系腫瘍に比べて組織型も少なく、その病理組織診断は比較的容易であると考えられる方も多いと思います。ところがこの脂腺系腫瘍、多くの皮膚科医が知らない間に、その概念が大きく変わってしまったのです。

私が皮膚科医になった40数年前は、ちょうど病理診断に免疫組織化学染色が導入し始められたころで、免疫組織化学染色が比較的診断に有用である『汗腺系腫瘍』が、時代の花形の一つでした(と勝手に思っています)。一方、当時、脂腺系腫瘍に関しては、腫瘍細胞の成熟脂腺細胞分化を証明する方法が脂肪染色しかなく、それにはパラフィン包埋切片が利用できなかったため、その病理組織診断は困難で、「脂腺癌」という診断にはめったにお目にかかれませんでした。私は、時流にとり残されていた「脂腺系腫瘍」について、パラフィン切片を用いた免疫組織化学染色による診断に挑戦しました。いくつかの成果を得られたことから、より脂腺系腫瘍の病理

組織診断に興味をもち、そのころ、唯一の同好の士であった佐賀大学皮膚科の三砂範幸先生といろいろな議論をしていました。そこからは、脂腺性境界新生物(低悪性度脂腺癌)の考え方が生まれました。これはその後、海外でも同様の報告がなされ、一つの疾患概念として定着しつつあると思います。

一方、当時、付属器腫瘍の病理診断に関する概念の形成は、高名な皮膚病理学者である A.B. Ackerman のほぼ独壇場で、彼は豊富な症例経験を基に多くの衝撃的なコンセプトを発表しました。脂腺系腫瘍に関しても、脂腺腫(sebaceoma)を脂腺系の良性腫瘍として確立したことと、「脂腺腺腫はすべて脂腺癌である」という考えを発表しています。後者に関しては、当時私の周辺の人たちは、『無茶なこといなあ』と苦笑していましたが、今はおおむね受け入れられていると思います。その辺りのことは、斎田俊明先生に詳しく解説していただきました。

このように、脂腺系腫瘍の病理診断には大きな変化がおこっているのですが、あまり周知されていないようです。今回の特集では、ほかに脂腺系腫瘍に関するいくつかのトピックスを取り上げました。脂腺囊腫の確実な認識、特殊構築をもつ脂腺腫、毛包脂腺性囊腫性過誤腫と色素細胞母斑の関係性などです。また、汗腺系腫瘍である汗孔腫類似の病変でも成熟脂腺分化を伴う症例が知られており、近年その遺伝子異常の特異性が報告されているため、そのような症例の解説もしています。脂腺癌に関しても、上皮内有棘細胞癌との関連、予後が良いのか悪いのかという問題、遺伝子異常に関する知見も紹介していただきました。それ以外にも、脂腺系腫瘍のひとりの最新知見や、古い概念の現在の立ち位置を確認できるような構成を考えました。

最後には、私が若手のころから尊敬してきた先達である斎田俊明先生と、脂腺系腫瘍の病理診断で日ごろ私たちが悩んでいることを赤裸々につけ合う座談会も掲載しました。私たちの日ごろの愚痴のぶつけ合いもお楽しみいただければと思っています。